

第二回

井上靖記念文化賞

選考委員会

平成三十一年二月十六日

東京ドームホテル（東京都文京区）

贈呈式

令和元年五月十八日

アートホテル旭川（北海道旭川市）

第三回 井上靖記念文化賞

おもしろ

たっひろ

大城 立裕

作家

●贈賞理由

戦後日本文学に、豊かな稔りと鋭い問題意識をもたらし続ける「沖縄文学」を牽引



【略 歴】

1925年 9月19日沖縄県中頭郡中城村に生まれる

1943年 上海の東亜同文書院大学予科に入学

学部に進級して間もなく兵役。敗戦で大学閉鎖／中退

1946年 帰国。高校教師等を経て、琉球政府／沖縄県の公務員となる

1959年 『小説琉球処分』の新聞連載を開始

1967年 『カクテルパーティー』で沖縄初の芥川賞を受ける

1986年 経済企画課長等を歴任し、県立博物館長で沖縄県職員を定年退職

沖縄芝居実験劇場に参加—そこから出品した『世替りや世替りや』が、第22回紀伊國屋演劇賞特別賞受賞

1990年 紫綬褒章受章

1991年 沖縄タイムス賞

1993年 『日の果てから』で平林たい子文学賞

1998年 琉球新報賞

2000年 沖縄県功労賞

2002年 『大城立裕全集』（全13巻）を勉強出版から刊行

2010年 日本演劇協会演劇功労者表彰

2015年 『レールの向こう』で川端康成文学賞

（主な著書）

琉球／沖縄の歴史、民族をテーマとした前近代史三部作『神女』『天女死すとも』『花の碑』、近代史三部作『小説琉球処分』『恩讐の日本』『まぼろしの祖国』、戦後史三部作『日の果てから』『かがやける荒野』『恋を売る家』、ほかに、『カクテルパーティー』『対馬丸』『普天間よ』『花の幻——琉球組踊十番』『真北風（まにし）が吹けば——琉球組踊続十番』等

大城 立裕

沖縄で書きつづけて

敗戦の二年後に戯曲で文学をはじめましたが、動機は上海を追い出され、日本を追い出されたという挫折から、これからの沖縄でどう生きていけばよいかを探ることでした。いきおい、沖縄だけを書きつづけるようになりましたが、芥川賞をもらったとき、記者のひとりが「この人は沖縄しか書けないのではないの」と言ったそうです。私はそれに、「フオークナーはアメリカ南部しか書かなかったではないか」と思ったのですが、文学は東京だけのものではないということが、そろそろ認められる時代になったのですね。

沖縄の歴史を前近代、近代、戦後と分けて、それぞれ三つの三部作を書き、これで沖縄の歴史を私なりに総まとめで噛み砕いたつもりでいましたが、その愚直な仕事をこんど井上靖記念文化財団と実行委員会がきちんと紹介してくださったことに感謝しています。

受賞のお知らせをいただいたとき、その理由を伺ったところ、しこしことの数十年にわたって「私のもの」を書きつづけてきたことを認めてくださったのだということで、私の人生とともに、沖縄という最南端の僻地に、北端の北海道から光を当てていただいたのだと、感動いたしました。

有難うございます。

第三回 井上靖記念文化賞 特別賞

いとう かずひこ
伊藤 彦

歌人、若山牧水記念文学館館長、宮崎県立図書館名誉館長、
宮崎県立看護大学名誉教授

●贈賞理由

宮崎県を起点に『老いて歌おう』を責任編集する
歌人。全国版17集に及ぶ



【略 歴】

1943年 9月12日宮崎県宮崎市に生まれる

早稲田大学第二文学部哲学科卒業

早稲田短歌会を経て、「心の花」に入会。大学卒業後、宮崎に
帰郷し高校教諭となる。教員のかたわら作歌活動が続ける

1996年 歌集『海号の歌』で読売文学賞

1997年 介護施設でボランティアグループと「出前短歌大会」
を開催

2002年 「こころ豊かに歌う全国ふれあい短歌大会」第1回全国大会
を開催。以降、毎年開催しアンソロジーを発刊

2005年 歌集『新月の蜜』で寺山修司短歌賞

2008年 歌集『微笑の空』で逦空賞

2010年 歌集『月の夜声』で斎藤茂吉短歌文学賞

2013年 歌集『待ち時間』で小野市詩歌文学賞

2015～16年

歌集『土と人と星』並びに評論『若山牧水』で現代短歌大賞、
毎日芸術賞、日本一行詩大賞

2017年 西日本文化賞 社会文化部門受賞

2018年 歌集『遠音よし遠見よし』で詩歌文学館賞

こころ豊かに歌うふれあい短歌集『老いて歌おう2018
全国版第17集』を刊行

(主な著書)

歌集『海号の歌』『新月の蜜』『微笑の空』『月の夜声』『土と人と星』『遠音
よし遠見よし』等、評論『短歌のこころ』『若山牧水』等

伊藤 一彦

この度は、井上靖記念文化賞特別賞をまことに有り難うございます。選考委員の方々、そして井上靖記念文化財団、井上靖記念事業実行委員会の皆様にご心から御礼を申し上げます。

思いがけない受賞の連絡でした。全国の高齢者を対象とする短歌大会「老いて歌おう」の活動を長きにわたって私が行ってきたことが受賞理由とのことでした。高齢者、とくに要支援・要介護の高齢者に、日々の生きる思いを短歌にして表現してもらうことは心の支えになるのでないかと考え始めたことでしたが、関係者の協力により毎年全国から約四千首の作品が寄せられるようになりました。その作品を読みながら、高齢者が表現したい思いをいかに強く抱いているかをいつも感じてきましたが、それとともに短歌が心の表形式として大いに有益で有意義なものであることをあらためて考えたことでした。八十歳をこえて初めて短歌を詠んだという人の作品が素晴らしいことが稀ではないのです。私は心ひそかに合同歌集『老いて歌おう』を現代の「高齢者万葉集」と呼んでいます。ささやかなこのような宮崎での活動を、素晴らしい目的を掲げておられる井上靖記念文化賞にふさわしいとお認めくださったことは光栄に存じます。

私は宮崎県で若山牧水記念文学館館長をしていますが、井上靖氏に「牧水のこと」の文章があり、沼津中学時代に二度だけ牧水の姿を見、後に牧水の紀行文や短歌を愛読したことを書かれています。『夏草冬濤』にも牧水の歌が登場します。その意味でもこの度は嬉しく有難い御縁を感じます。なお、牧水は大正十五年十月初旬に旭川を訪れ、作品七首を詠み、紀行文「北海道行脚日記」に旭川の思い出を記しています。

選 評

大城 立裕氏

辻原 登 (選考委員代表)

時代とヴィヴィッドに関わりつつ……

大城立裕氏の文業はまだ終わっていない。芥川賞受賞作の『カクテルパーティー』(一九六七)から『小説琉球処分』(一九六八)、『内なる沖縄 その心と文化』(一九七二)、『恋する家』(一九九八)、『大城立裕全集 全13巻』(二〇〇二)と続き、『レールの向こう』(二〇一五年川端康成文学賞)、『あなた』(二〇一八)に至る氏の長年わたに亘る小説・戯曲・エッセイ作品は大きな山脈を成しているが、まだまだ造山運動は続いている。

私達が、近代小説と呼ぶ「文学」の発祥と中心に「英文学」があり、英文学は英国本土ばかりでなく、それに拮抗し、匹敵する存在として常にイエイツやジェイムス・ジョイスの「アイルランド(ケルト)文学」があつた。アイルランド文学なくして英文学の豊饒さと先進性は語り得ない。

我が「日本文学」を鑑かんみても、同じことが言える。近代日本の東京と関西を中心とした「文学」を撃ち、拮抗して来たのが「沖縄文学」であり、それがどれほど「日本語文学」を豊かならしめて来たか。そのことを、「平成」という時代の終わりと「令和」の新たな始まりのこの時に、私達は振り返り、再検証し、噛み締めてみるべきであろう。その中心に、大城立裕氏と氏の作品群がある。

大城氏への授賞は、この賞が、時代とヴィヴィッドに関わりつつ、優れた業績を顕彰する、という崇高な目的を鮮やかに証明するものである。

選 評

伊藤 一彦氏

篠 弘 (選考委員代表)

歌人の域を超えた福祉

伊藤一彦氏は、宮崎県宮崎市生まれの歌人。県内の日向市東郷村に生家の残る若山牧水、その記念館の館長として、九州歌壇の牽引車となる。魅力ある風土詠から出発し、すでに迢空賞、詩歌文学館賞、毎日芸術賞などの多くを受賞し、なお評論「若山牧水」(15・6)を書き、研究誌「牧水研究」の編集人になっている。

早稲田大学文学部哲学科を卒え、帰郷して高校教諭となるが、授業とケースワーカーを兼務し、その困難な労苦を詠んだ歌集「海号の歌」(95・9)は読売文学賞を受ける。かつて大岡信は、たとえば「十通り以上の死に方語り終へ少女はおほきためいきつきぬ」などを紹介し、生徒の悩みの聞き役に徹した、その優しさを認めていた。

教諭定年後は、そうしたカウンセラーの体験が買われて県立看護大学教授となる一方、以前から始めていた高齢者の作歌活動を支援する。施設に赴いての出前指導をおこなうと共に、ボランティアグループの集めてきた短歌の選歌や添削をする。最近の歌集「光の庭」(18・6)に「励まされつつ選歌せり百歳をこえたる人の生の香りに」と、選歌する愉しさを詠む。

この運動は、さいわい宮崎の県政・市政の賛同を得て、一年一冊のアンソロジーにまとまり、大会が開かれる。第六回から宮崎で全国大会が行われ、昨年の第十七集は二一九首が収録される。短歌集『老いて歌おう』全国版の年刊は、歌人の領域を超えた福祉に外ならない。

井上靖記念文化賞選考委員会

選考委員長 篠 弘 歌人・日本現代詩歌文学館館長

選考委員 斉藤 佳典 北海道新聞社編集局文化部長

酒井 忠康 美術評論家・世田谷美術館館長

辻原 登 作家・県立神奈川近代文学館館長

藤澤 全 元日本大学教授・国際関係博士

(五十音順・敬称略)

